

五教神

一

13
984
1





○生死流轉玉散袖自序

鬼を畫と。功ハ成安く。狗馬を画と。功ハ成

難しと入。韓文公が確言異端虚無宗

の教とハ朱子先生の正論也。釋阿の教行

虚説妄誕と言バ。何を以くり。因果應

明

の惑心まごころを解とるらんや。紅顔こうがん空くわしく変へる

桃李とうりの粧よそおひを失しふひぬれも。諸行あまきやうむぢやう無常むぢやうの世よの

光景あかり夕ゆふアあ道みちハは聞きゆゆとも。朝あさハは黄泉よみの旅たびハ

起おこるるふと。是こゝ生滅せいめつ法ぽうの理こと。嗚呼あゝあんと生滅せいめつ滅めつ

為な。ヲをツトつと合あ點てん寂滅じやくめつ為な樂らく夢むを現あらわる。知しるるゆとも。

轉くわん但だ槃はんの。經言きやうごん倚よ語ご一字いちじ不ふ説せつの。切き幕まく

から。其序そのしよむむききををまま於おと爾也おんや。

文政四辛巳年正月

東里山人誌









目録

上の巻

發端。方便の門を開き
眞実の相を示す説話

第二回。和光同塵の結縁の
始め煩惱を解説話

中の巻

生死流轉玉散袖上巻

東里山人著

發端 方便の門を開き
相を示す説話 眞実の

合者離之始。樂兮憂之伏。在る所ありし。悟里多し
白居易も。子をさし立。枕も残る。藥を恨む。聖人まら
慈悲の惑ひの解。況や凡俗はおろそや。生者
必滅の理も。會者定離の金言も。其場に至て如何ぞ。

胸むねは浮うむんや。されば悲かなしきもの。至いたるかや。死しんぞくしき
夫おとこは折おれしと。老おいく子を失しひしよし。哭なげののりありと。
人ひとをも身みをも。恨うらむんよ。嘆なげ志しの火ひ。鎮しずると死しあり。煩わづ悩なの犬いぬ
遂ついどもまど。我われ慢まんの鬼おにのほのめ立た愚おろ痴ちの地ぢ獄ごくを。おのこ
よ。作つくり然しかく。已やらう隊たいちると。御おん新あら也なりも説とめえり。爰こゝに
昔むかし彌や念ねん天下てんかの頃ころ。然しかく國くに行ゆ脚あしの僧そう子し。夢ゆめ世よ法はふ師しといふ
者ものあり。生せい國こくを尋たづねれば。武ぶ藏ざうの國くに宮みや戸こ川がわの邊へに住すむ。
頗ま富ふ家けの者ものありしが。春はる而して舎やを捨すて。まどよ出家しゅつが遁とん世せ

前上

のこみとあり。由よし縁ゆかり故ゆかりの。ゆきと俗ぞくたりしと死し夫婦ふうふ睡あまりく
をらせり。あると死し法はふ用ようありと。暫しばし他た國こくへ赴おもむき。跡あと
まつく妻つまハ隣となりたる家いえの令おん郎らうと。蜜みつ子こ心こころを通とほじ合あふ義ぎ
を。あせし飛とべ夫おとこ帰かへりしとあは。死しんを死しに。かの蜜みつ夫おとこと
論ろん議ぎと。夫おとこを殺ころえと思おもふる出で来きまり。頃ころと夫おとこの飯いひと
いふ頃ころ妻つまハ毒どくの酒さけを造つくりし。待まちたると程ほどもあは。家いえ子こ淨じゆ
ろよ。妻つまハひたつ。遠とほくの旅たびの勞らうを。あはしむ。さらら
せんとおひて。酒さけを釀つうみきとぶらあり。いまづ進まりまりんせ

とく。給仕婢女をよび其酒持てまの目と。いひ附くるふ。
契婢女もよび。狼藉しきものをも取り。契毒の酒のユミ
をも。能くうられ。今い酒を持せ。眼前に主を殺さんと
我不義也。内室君の悪逆よとあり。亦明白説けるを
いせんも。いひくれば。如何にせんと。志棄るべし。出ひくるが
よと思ひ出しく。毒の酒を持せ。つぎと躑躅倒し
酒をこれ壊捨る。係るたきと。知れば。なきに怒り。下女
を捕く。打手鄭子妻へを。下女が苦痛の余不

萬一吾身の人の。あつと。思ひくれば。共よ
手荒き呵責し。さよ。婢女を打殺しぬ。夫婦は一時
の怒りよ人の命をとりし。偏に短急の誤りありと。後悔
の涙胸を凍し。愁傷のやみの心を傷ち。死骸は對して
さるべし。他云ふ。せめての追禍の營こそ。渠が迷ひのや
や。散ると最懇情よ。母の送るをほ。其高僧の
聖人を侍侍して。萬まの経を誦し。香花をよ。向借粮
して。諸其のハ異義あ。ま。妻の不義ハ。尚止

まゝの^{あつとめ}夫の目を忍び^{あめ}びく^{こころ}。心を通^{つう}じて^{いつ}一刻のち^ちま^まふ^ふ
 見^まる^る。夫の^{あつとめ}目^めを^{あめ}忍^{しの}び^びく^く。心^{こころ}を^{つう}じ^じて^て。一^{いつ}刻^{こく}の^ちま^まふ^ふ
 千^{せん}歳^{さい}の^{かん}感^{かん}通^{つう}を^あし^し。天^{てん}理^り不^ふ欠^ける^る。月^{つき}日^ひを^あ過^あり^りたり^りま^ます。
 毒^{どく}酒^{しゅ}の^あゑ^える^る。下^{した}女^{にょ}が
 忠^{ちゅう}死^しの^あら^らむ^む。あ^あど^ど。ひ^ひと^とく^く。夫^{あつとめ}が^{みみ}耳^{みみ}は^き聴^きく^く。バ^か憤^{ふん}怒^ど骨^{こつ}髓^{ずい}不^ふ
 徹^{てつ}し^し。妻^{さい}を^あ呵^か責^せして^て。さ^さら^らに^に婢^{べい}女^{にょ}が^{くる}苦^{くる}痛^{いた}死^しせ^せる^る。醉^{すい}ひ^ひと^と
 打^{うち}敲^かく^く。果^{たま}に^に赤^{あか}裸^{なだ}と^なり^り。手^て足^{あし}を^あ縊^あく^く。庭^{にわ}の^い泉^{せん}水^{みづ}不^ふ
 漫^{まん}く^く。寒^{さむ}風^{かぜ}が^あ吹^ふき^きさら^らさ^さり^りて^て。さ^さら^らに^に凍^こ冷^{れい}死^しせ^せる^る。さ^させ^せる^る
 くる^{くる}。斯^{かく}て^て下^{した}女^{にょ}を^あ葬^あり^り。辺^へに^に妻^{さい}の^し死^し骸^{がい}を^あも^も埋^うめ^める^る。善^{ぜん}

悪^{あく}塚^{づか}と^な名^な号^{ごう}。近^{きん}隣^{りん}合^あ壁^{へき}の^あ人^{ひと}々^々。下^{した}女^{にょ}が^あ忠^{ちゅう}節^{せつ}。妻^{さい}が
 不^ふ義^ぎ我^{われ}身^みの^あ因^{いん}果^が物^{ぶつ}倍^{ばい}して^て。直^{ちやく}に^に剃^し髪^{かみ}あ^ある^る。世^よを^あ思^{おも}
 深^{ふか}の^あ衣^いは^あ換^かわ^わる^る。さ^さら^らに^に夢^{ゆめ}世^よ法^{ぽう}師^しと^なり^り。さ^さら^らに^にび^びく^くり^りくる^{くる}。
 夢^{ゆめ}の^あ世^よを^あ思^{おも}ふ^ふ。さ^さら^らに^に夢^{ゆめ}あ^あれ^れや^や。何^{なに}を^あ現^{げん}と^なり^り。定^{さだ}む^むぎ^ぎさ^され
 と^と憑^より^り。さ^さら^らに^に世^よを^あ悟^{さと}す^す。棲^{すい}別^{べつ}し^し。古^こ卿^{しやう}を^あ世^よ發^{はつ}す^す。
 京^{きやう}師^しの^あ方^{かた}と^な志^し慮^{りょ}。さ^さら^らに^に謙^{けん}念^{ねん}あ^ある^る。建^{けん}長^{ちやう}寺^じ。光^{くわう}明^{めい}ら^ら等^{とう}
 の^あ灵^{りやう}場^{じやう}を^あ頻^{ひん}拜^{はい}あ^ある^る。夫^{あつとめ}より^{より}鶴^{つる}ヶ^が岡^{おか}八^{はち}幡^{ばん}宮^{みや}へ^へ結^{むす}ぶ^ぶる^る
 不^ふ契^{せき}頃^{ころ}。将^{しやう}軍^{ぐん}家^けより^{より}。造^{ぞう}管^{くわん}成^{じやう}就^{じゆ}あ^ある^る。莊^{しやう}嚴^{げん}更^{げい}こ

人の目を驚まし。金銀瑠璃碑礫の梁碼磁珊瑚琥珀の鏡。日は映して色を争ひ。境内蓋明照火輝く。その美麗を拜見せんと。近在の老若男女。日々群衆して。人豆の絶間あられが。その切り近き者。糸指の人の懐を見當り。銭使けせんとして。俄に履篋張の茶店。蒲団の八景を移し。菰苳の酒店。西湖の十景を成す。粟餅の曲春。祇園豆娘の曲代曲馬。怪業具細工樂焼の作里物。あるひに竹田の人形口上。随々文字と虫

善舞の異人幣帛とゆき。象頭山の百歩一を現む。揚貴妃を欺む娘。李夫人を厭む。満花齡。往來人小見く。直しと。綾羅の袂を翻し。綿練の衣をば。とひ。奇麗あつらひ。昭火めく。さあから。天人の影向も斯や。と計。驚馬感で。夢世法師も愕然。果志ど。これと。わく。在らそや。黄昏ちくく。あはれま。蟻のごとく。集りし人豆も。りり。東西ふ散去。蜂の如く。群がりて。利慾を闘ふ。商人も。罫を急ぐ。雀鳥と共。おのが家

路子立故まば八幡宮の境内へ大風の吹し跡のどく。
神前の御燈さへ幽うお暗火を星月夜鼻の声を疎
げよ人の腸を引悲しき世法階はほくぐくと安
光景をとんと。諸も浅まし死入人の心あり。今日何事ん
あくび宮子指どおのがさめぐ。もま如意の立願を
懸あぐら。誰あくと獨王。通夜しなりと。御灯を挑
かんときるあるきこと是非もあし。そあく安御神ハ
忝けあくも。人皇十六代の帝。應神天皇の御代也

御神詔。我無量劫より以来三有に化生しとく。
善功方便を修し。諸の衆生を濟度を我名を大
自在王菩薩と曰ぐ。とありしより。則ち大菩薩の
號。勅許あり。係る有難き御神を。疎略ふあし
なむるやと。急ぎ拜殿の。濱椽ちりく。跪びきと。款
阿の御名を唱えつ。よく佛智の廣大あるを思
く生地の夢さめく。中覺の寤つてお至らんことを
願ふ。今宵の爰に。通夜しなると。椽の傍に倚て

周る北斗の空を詠望居たりし夜も次中不更り
丑満の鐘をくくと響音く頃判白衣の束帯ありし
者一人忽ちと歩行来るふ夢世法師備子潜然て是
をまじりて髪をくく肩に垂白き鉦をもちし
奈何さぬ神主の餘義なき立願あやと思ひたる如
かの人神前近く倚りて大自在王菩薩を告ぐ敬白
今宵御氏子の中に出産ありの四人あり大なるどの
もの守護のなり御出馬もあらざるや斯言上の俱生神

ありと名乗るべが社の唐戸自然に開き内陣のた
帳を掲げ白馬も歩踏下り八幡大菩薩出現まじり
ハコシハく俱生神ぞあり毎度御太義もぞんじまら
某も兼く氏子の中は臨月の婦人あるもの兼知にして
ごれども契程造営のころさうり取紛まことおあつた
中社え迂宮路とごれが萬端不子都合し今宵月
まら殿におまらせやたし悪あく安産しませや母子
不怪殺のあきや御守まらるべし

はど。是ハ美礪麻子御造管。忍收よごんトカカ定めて御
混雜の美と。推察はれバ拙者一人ハ異あく。相さまし
カスづく。去あがら如生の子。生涯の禍福吉凶。老衰榮枯
の美ハ産神の授けもふおあれど。これきづく支らるべしト
[ハ]ハらぬとて。まのの序いし。馮天と。と暫らく
考へ都合申人のふあれど。かの叙尊ケ涅槃經ト説ける
四句の文を授けられたり。天帝ハ某よふとを奏聞
よあふんがふし。とて。[神]らぬまし。とて。後ハ安居ハ

まのの序いし。と。表の方ハ立あれハ。社の名ハ
ハ。かのえの如し。聞かす。夢世法師ハ備ハ。潛然と。
世も不測のふも。と。聞のるま。世倍の傍ら。若しは
聴かむ。びつと。目の前を賭す。ハ今霄々今と
傍も奇代の珍る。ゆか。と。ち。のち。音信を。聞まわし
まの眼も。の。待居る。と。曉判の一番鶏啼頃ハ
かの竹。立。成。て。以前。の。音。あ。唐。戸
関。ハ。播宮出現。ハ。[ハ]。コ。ハ。度。の。心配

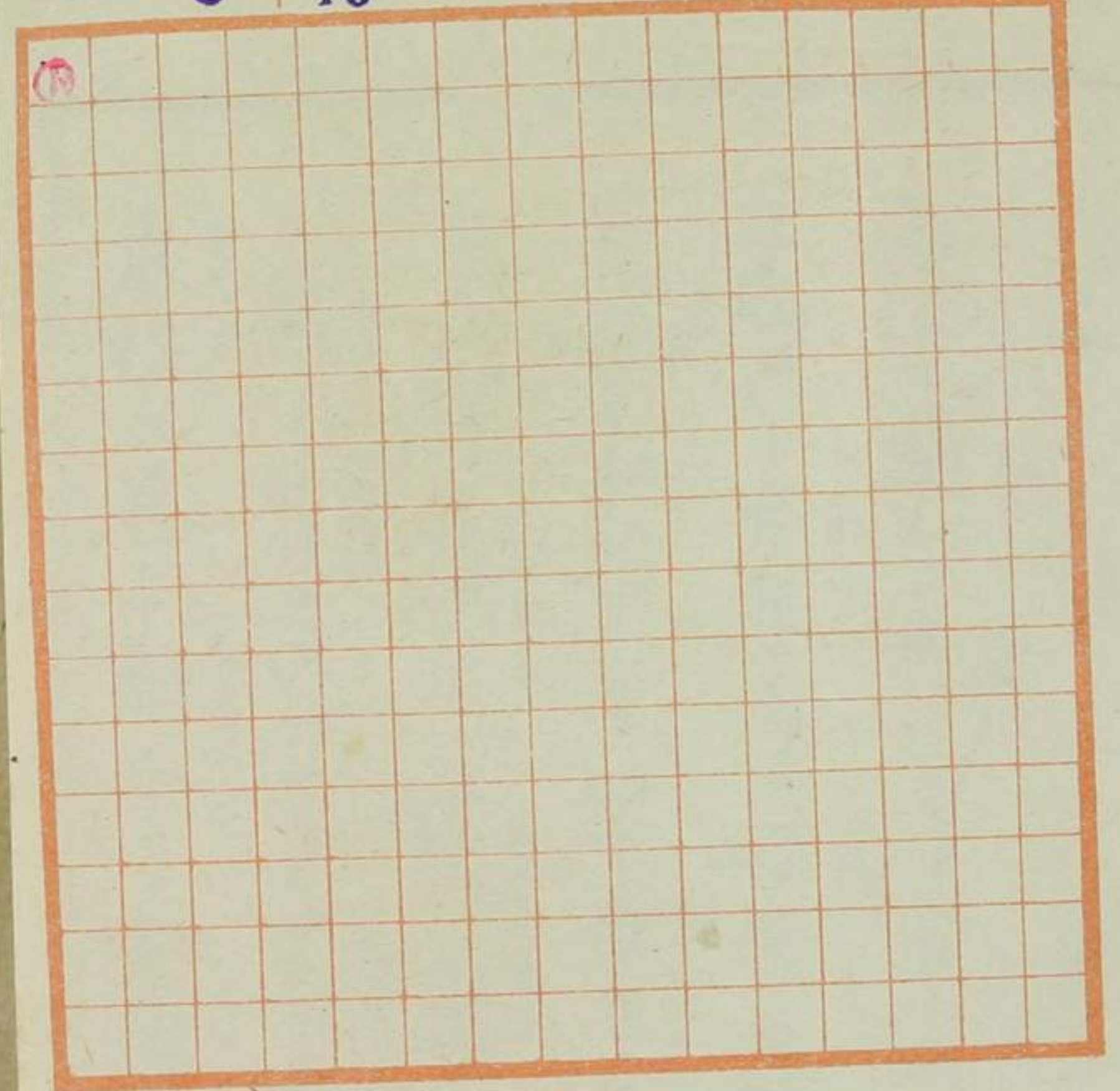
若山
田屋伊助
書林
萬治
書

某もふらぶえ業しゆゆあり。子この印いん押おしととあり。よくあり
ししのしあありり修しゆつつりりががももももととてて修しゆつつりり安あん産さんありありてて拙せつ者じや
おわおりりもも満まん足そくせせうう。先ま一いむむんんがが聖せいの下したのの萬まん福ふく屋や長ちやう兵へい衛ゑい
がが妻さい初しよ産さんありありてて男なん子し多たれればば則すなはちち諸しよ行ぎやう無む常じやうのの文ぶんをを
授まげげままるるままりり其その次つぎがが桐きりヶが谷やのの利り德とく屋や萬まん助じゆがが妻さい二に度たぎ
目めややとと女にょのの子しありありててままたたハハ是せ生せい滅めつ法ぽうのの文ぶんをを授まげげままるる
ありあり。ままたたハハ目めのの扇せんヶが谷や若じやく永えいぞぞのの藩はん中ちゆう。欲よく張ちやう切き藏ざうがが妻さい
初しよ産さんありありてて女にょのの子しありあり。是こゝハハ生せい滅めつ法ぽうのの文ぶんををままるるけけ

ををままるるありあり。目めハハ七しち里りがが濱はまのの渾こん跡せき阿あ弥や平へいがが妻さい。是こゝハハ
初しよ産さんありありてて男なんのの子しありありててままたたハハ寂じやく滅めつ為ゐ樂らくのの文ぶんをを授まげげ
ままるるありあり。以上いじやう四し人にんののらら。二に人にんハハ男なん子しありありてて。二に人にんハハ女にょ子しありありてて母ぼ子し
このこの小こ恙じやうありありれればば安あん堵どありあり。ままとといいひひ捨すてくく。立た帰かへりりハハ播は磨ま宮みやうのの
暇ひまををいいくく。肉にく陣じんののららちちハハ入いりりのの夢む無む法ぽう除じゆハハ矢や立たのの若じやく不ふ
多た事じ多たくく。旅りよ日にち記きののををいいええ是こゝををままるる純じゆん一いつ。積つりりのの盛せい
盛せい衰すいももつつららいいふふるる理り。今いま腎じん生せいしし。四し人にんのの子しありあり
ややるる奈な何なにあありり。必かならず衰すい榮ゑい枯こららるるとと。獨ひとり嘆たん息いきははよよるる

夕
夕
夕

3年10月



○夢
是より。京師

くちろ
化せし。四人の子供成りて
句の支附合しと身を果を
歳立て后契法作老翁と
不測多於俱す林の吉
悟の心を驚きまはるぐ。まて

前上九

夕
五

○夢む 是これより。京師きやうし 拜まが 旅たび 日記にじき のをを 小書せうしよ 記き せし。四よ人の子供こども 成な ちて。さあめぐあ 哭な 悲な あり。物もの 法はふ は四よ句くの文ぶん 附ふ 合あ して身み をを 景けい あり。世よ は出い ずるあり。四十よ 余あ 年ねん の歳とし 立た ちて后のち 契せき 法はふ 昨けつ 老らう 翁おん とあり。かの子こ 供ども 名な は巡めぐ り遭あ へ。不ふ 測そく あり。俱く 生せい 林りん の吉きち をを 聞き けり。昔むかし のの ぐらら は各おの 迷ま 悟ご の心こころ をを 驚おど かしめし。まま ちてて 兼せ 後ご 五ご 卷まき は解と 分わ かるをを 聴き けり。

